海外レポート

ビーレフェルト留学体験記
―― 研究と交流をめぐって ――

前田　充洋

はじめに

ドイツ北西部ノルトライン・ヴェストファーレン州はオスト・ヴェストファーレン・リッペ地域にある人口30万人弱の都市ビーレフェルト。フランクフルト国際空港から列車で北上し3時間ほどで到着できる。13世紀中葉に建てられた城砦や19世紀後半に隆盛した自転車工業企業など，歴史を色濃く残すこの都市に「改革大学」の一つとして1969年ビーレフェルト大学が設立された。2012年12月1日から2013年10月3日の約10ヶ月間，日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム ―― EU域内外におけるトランスローカルな都市ネットワークに基づく合同生活圏の再構築 ――」の助成をうけてこの地に留学することができた。目的は研究を深めることはもとより現地の研究者と交流を深めることであった。以下では留学中の研究活動を述べ，海外の研究者と交流することの意義について考えてみたい。

写真1：城砦シュパレンブルク Sparrenburg からのぞむビーレフェルトの街並み。2013年著者撮影。

1. 大学の環境

中央駅から4番トラムに乗り大学駅で下車。駅出口と直結している入口から大学キャンパス内に入るとその大きさに驚いた。メインの建物はショッピングモールのような構造で，入口ホールを中心に研究科棟，事務所やサポートセンターが全て同じ建物の中にある。機能的なつくりだが部局の間を10分程歩かなくてはならず，学生証発行，ゼメスター代支払（220€）や図書館利用証発行など手続きだけで非常に体力と時間を要した。

滞在期間中は共同研究室の一角にデスクを貸与してもらい，客員研究員ながら良い環境を与えてもらった。歴史学部にはハンス=ウルリヒ・ヴェーラー，ウーテ・フレーフェルトら近代ドイツ史の「新しい傾向」を牽引する研究者が歴代在籍している。今回の受入研究者アンゲリカ・エップル Angelika Epple 教授もその一人である。近年の研究ではケルンのチョコレート企業シュトルヴェルクの原料調達や販売の方法と展開といった活動に着目し，史料に即した細緻な事例分析という歴史学のスタンスをとりつつ，企業活動をグローバリゼーションの過程にそくして考察するために社会学や地理学の理論も用いている。

留学中にドイツの鉄鋼業企業クルップ社の対外活動，とくに日本にむけた活動を明らかにし国家間の経済関係を見直す射程を得ようとしていたため，エップル教授の指導は非常に有益であった。

写真2：学キャンパス内，入口ホールの様子。2013年著者撮影。

2. 研究相談と文書館訪問

12月をほぼ滞在手続きに費やしようやく1月にエップル教授と研究について相談できた。早速そこで大きな壁にぶつかった。まず「クルップ社の海外（主に日本）にむけた企業活動と相手国の対応から，両者の関係が漸次的に形成されていく過程を浮き彫りにしたい。そのうえで国家間あるいはドイツの経済体制を構造的ではなく動態的にみつめる射程を得たい」と述べた。エップル教授からは「興味深いテーマね」と言っていただき様々な文献を紹介してもらうことができた[1)]。しかし問題はそ

の後である。研究史を整理し「他でなされていない」と述べると「確かですか?（Sicher?）」と何度も尋ねられた。次の日，基本文献から専門分野の文献まですでに読んだこともある文献も含めて網羅的に図書館から借り出し，自身の研究を「一から洗いなおす」作業をはじめた。

ゼミナールにも参加した。オンライン履修システムで登録すると報告担当者のテキストがメールで送られてくる。それを読んでゼミに臨む。参加者の主なテーマは「19 世紀パリにおけるドイツ人外交官の『正当性』」などミクロな事例から国際関係に射程を広げようとするものが多い。ゼミでは学生主体で議論が展開され，エップル教授は司会に徹して議論を整理し当座の課題を投げかける。素早いドイツ語の議論についていけず行く末を眺めていることが多かったが，エップル教授が「まず皆で質問を出し合いそれから議論をしましょう」と提案してくれた。おかげで「何をもって『正当』とするのか」など質問を事前に考え，部分的だが議論に参加できた。

自分が報告するときもテキスト送付しなくてはならない。7 月初頭に順番がまわってくるため 6 月までに文書館に赴くことにした。向かうは工業都市エッセンにあるクルップ歴史文書館である。ここには統計史料をはじめ取締役会と軍部の往復書簡や下請け工場の記録など企業文書が所蔵されている。エッセンにはビーレフェルトから急行列車に乗れば 2 時間ほどで到着できる。片道 26€ と高額だがゼメスター登録期間中には，州内の交通機関を自由に利用できるチケットが支給される。エッセン・ヒューゲル駅で降りルール川を右手に進むとすぐに入口が見える。文書館は 1873 年に完成したクルップ家の元迎賓館兼邸宅であるヴィラ・ヒューゲルに併設されている。敷地内に入るとそびえ立つヴィラ・ヒューゲルの横にある歴史展示館の 3 階が文書館である。

3 階へは警備員の鍵がないと立ち入ることができない。完全予約制である。入口で警備員に予約をしている旨を伝え通してもらう。到着すると文書館員のフォス Heinfried Voss 氏と相談しつつ目録をめくり，閲覧したい史料を取り出してもらう。『1903-1906 年における日本への鉄鋼供給』や『1896-1902 年，1906 年における日本との取引関係』など日本への製品供給をめぐる書簡やテレグラフなどを閲覧した。クルップ社が現在も事業展開している企業だからであろうか，史料の印刷や撮影が一切許可されていない。そのため必要な箇所を地道にメモしていかなくてはならない。2 週間強通いつめ，集めた史料をもとにゼミ報告の準備をすすめることにした。

3. テキスト作成とゼミ報告

6 月中旬にテキスト作成に着手した。導入から先行研究整理，本論へと議論を組み立てていった。会話にようやく慣れだした頃のテキスト作成は難航したが，博士課程に在籍する友人たちが助けてくれた。とくに当時エップル教授の助手をしていたヴェレーナ Verena Limper と彼女の友人フローリアン Florian Sensey には助けられた。ヴェレーナはビーレフェルト到着以降，多岐にわたり面倒を見てくれた。テキストの添削についてはフローリアンが助けてくれた。彼はコロケーションにはじまり文献引用の根拠や気付かなかった議論の穴など細かくチェックしてくれた。彼が多忙なときは向かいの研究室にいる現代史学科のシュテファン Stefan Isernhagen が添削してくれた。彼らの助けもあり報告 5 日前にはテキストを完成させることができた。

報告当日はまず現在のテーマにいたった経緯を述べ，その後テキストについての質問を受けた。様々な角度から質問を受け，しどろもどろになりながらゆっくりと回答していった。エップル教授の提案もありゼミ終了後には質問内容をメールで送ってもらうこともできた。その後エップル教授に改めて相談し，報告で得た疑問や浮かび上がった課題について指導を受けた。

写真 3：クルップ歴史文書館の外観。2013 年著者撮影。

写真 4：講演後のパーティーの様子。2013 年著者撮影。

7月中頃にゼメスター終了講演がある。日々開催されるコロキウムの内容が専門分野や時代に特化したものにたいし終了講演では全時代的通史や歴史理論など大きな枠組みが提起される。その後はパーティがあり情報交換や憩いの場となっている。ここでも研究への指摘や文書館の情報を得ることができ，非常に有益であった。

おわりに

2013年10月3日，遅れることなく関西国際空港に到着した。10月にもかかわらず夏のような暑さだったことを覚えている。ゼミ報告以降，ベルリンの連邦文書館訪問やボローニャでの国際シンポジウムへの参加など多くの出来事があったが，紙幅の都合上割愛せざるをえなかった。それらの様子についてはプログラムのホームページを参照されたい[2)]。ここでは被派遣者の報告書が毎月掲載され研究をはじめ生活やイベントの様子などが詳細に紹介されている。本稿の一部もその内容に加筆修正したものである。ホームページ更新は2014年4月に渡欧した新たな被派遣者に引き継がれている。それによるとなじんだビーレフェルト大学にも変化があった。ひとつはキャンパスの建て替えである。5月中旬には歴史学科が新キャンパスに移動したらしい。見たところ旧キャンパスよりも開放的なつくりである[3)]。いまひとつはヴェーラー氏逝去の知らせである。本稿執筆中に現代史学科の友人がメールで知らせてくれた。すぐにインターネットで調べてみると大衆紙『フランクフルター・アルゲマイネ』紙のサイトにも訃報が掲載されていた[4)]。退官後もなお精力的に研究を続けておられたようで何度も姿を拝見した。コピー室や廊下で会うと気さくに声をかけてくださり，挨拶程度だが言葉を交わすことができた。ドイツ史の「新しい傾向」である社会構造史を牽引してきた大御所の逝去に心よりご冥福をお祈りしたい。

最後に交流について考えてみたい。研究をおこなう以上，研究史における自身の「立場」を明らかにし，そのうえで様々な資料をあつかい新たな事実や見方を提示する必要がある。しかし「他国のこと」をテーマにすると「先に触れられていないもの」はなく部分的にせよ別の視角からにせよ言及されている。エップル教授に「確かですか?（Sicher?）」と聞かれなければ「自らの立場」を再確認せず盲進していたかもしれない。自身の立場をより客観的に見つめる機会を与えてくれる。交流にはそうした意義があるのではなかろうか。様々な交流からうけた多くの刺激によって今後も自身の研究をさらに発展させていきたい。

註

1．たとえばRanderia, Shalini/Fuchs, Martin/Linkenbach, Antje（Hg.）, *Konfigurationen der Moderne: Diskurse zu Indien, Soziale Welt Sonderband 15*, Nomos Verlag, Baden-Baden, 2004を紹介していただいた。

2．次のURLを参照。
http://ucrc.lit.osaka-cu.ac.jp/zuno/index.html

3．犬童芙紗「月度報告書（5月度）」
http://ucrc.lit.osaka-cu.ac.jp/zuno/cgi-bin/dispatch/list.cgi?eid=1403850919（2014年7月7日閲覧。）

4．http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/
（2014年7月7日閲覧。）